



Title	日本語と中国語における移動表現について
Author(s)	高, 一波
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(高一波)	
論文題名	日本語と中国語における移動表現について
論文内容の要旨	
<p>日本語と中国語は移動事象を表すにあたり、まず表現形式においては様々な相違が見られる。日本語はSOV型の言語であり、中国語はSVO型の言語である。</p> <p>移動表現の類型論から見ても日本語と中国語はそれぞれ異なるタイプの言語である。</p> <p>移動を構成する諸要素として、移動物 (Figure) ・参照物 (Ground) ・移動の事実 (Motion) ・経路 (Path) ・様態/原因 (Manner/Cause) がある (Talmy (1985))。</p> <p>その中、経路 (Path) は移動事象の中核スキーマであり、それには位置関係 (移動物の着点と参照物との位置関係) ・経路関係 (移動物が通る経路) や方向関係 (away fromやtowardなどが表すような方向) といった下位分類がある。</p> <p>一方、様態 (Manner) は移動に伴う手足の動き・速度・手段などのような付随的要素のことを指す (Talmy (1985) ; 田中・松本 (1997))。例えば「歩く」や「走る」が表す移動物の位置変化に伴う手足が交互に（「走る」の場合はより速く交互に）動く様も様態の一種である。</p> <p>Talmy (2000) によると、中核スキーマの「経路 (Path)」がどの表現形式によって表されるかによって諸言語の類型化ができる。</p> <p>日本語は移動表現において中核スキーマの「経路」を主に動詞で表すことから、動詞枠付け言語 (verb-framed language) に分類される。一方、中国語は英語と同じく中核スキーマ「経路」を衛星 (付随要素とも言う) で表すことから、衛星枠付け言語 (satellite-framed language) とされている。実際、中国語の移動表現の類型に関しては意見が分かれているが、本研究では中国語を衛星枠付け言語として扱い、中国語に見られる典型的な衛星枠付け言語との相違点を衛星枠付け言語における内部差異として扱う。</p> <p>日本語と中国語は移動表現の形式において様々な相違が見られる他、互いが対応していると思われる形式も場合によっては同じ移動事象を表すことができない。</p> <p>本研究では日本語と中国語における各場面の中間経路指向の移動表現を中心に考察することで、日本語と中国語における移動表現の異同を検討する。</p> <p>本研究は以下の角度から移動表現を考察する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①境界を越える移動と境界を越えない移動。 ②客観方向と主観方向。 ③客観移動と主観移動。 ④主体移動と客体移動。 <p>境界を越える移動とは空間の境界を越えて複数の空間場所に関係する移動のことを指す。それに対し、一つの空間場所にしか関わらない移動は境界を越えない移動として扱われる。</p> <p>発話者の視点が向けられる方向は主観方向であり、移動と空間場所との固有的な方向関係は客観方向である。</p> <p>客観移動というのは現実に起こる移動のことを指すが、主観移動とは現実に起こっていないが、さも移動が起こっているかのような表現をとる移動のことを指す。</p> <p>主体移動とは移動主と動作主が一致である場合の移動のことである。それに対し、客体移動とは移動主と動作主が一致ではない場合の移動のことを指す。</p> <p>まず、境界を越える移動表現は、「交差点を渡る」「部屋から出る」「学校に入る」などといったような空間の境界を越えて複数の空間場所に関係する移動表現のことを指す。それに対し、「森を彷徨う」「グラウンドを走る」というような一つの空間場所にしか関わらない表現は、境界を越えない移動表現と呼ぶ。</p> <p>ある表現は境界を越える移動であるか、あるいは境界を越えない移動であるかは、その表現における移動動詞に大</p>	

きく関わる。移動動詞は「経路」が含意されるか、あるいは「様態/原因」が含意されるかによって大きく二つの種類に分けることができる。

本研究は日本語の「渡る」「通る」や中国語の“过（渡る；通る；過ぎる；…）”“上（上がる；登る；…）”などのような「経路」が含意される移動動詞を経路移動動詞と呼び、日本語の「走る」「歩く」や中国語の“走（歩く）”“跑（走る）”などのような「様態/原因」が含意される移動動詞を様態移動動詞と呼ぶ。

場所名詞と共に起する際に、経路移動動詞は一般的に複数の空間領域に関わることを要求する。例えば「橋を渡る」や「山を越える」の場合において、「橋」と「橋の向こう」の境界線、「山のこっち側」と「山の向こう側」の境界線を越えることで移動行為が完成される。それに対し様態移動動詞の場合、「廊下を走った」「道を歩いた」というように移動行為が完成していくても移動主が廊下/道に位置するかしないかは明白ではない。それは様態移動動詞が経路移動動詞と異なって、複数の空間領域との関わりを必ず要求するとは限らないためである。

このように、経路移動動詞と様態移動動詞は「境界越え」という点においてそれぞれ異なる性質を見せる。経路移動動詞文は一般的に境界を越える移動表現であり、境界を越えない移動表現であれば様態移動動詞が表現の中心を担うことになる。しかし、たとえ様態移動動詞が中心を担う移動表現でも、文の要素によっては境界を越える移動表現であるという可能性も存在する。

また、移動は局面によって起点指向・中間経路指向・着点指向という三つの分類に分けられる。その中で、中間経路指向はさらに経過域と経過点に分けられる。

移動の局面から見ると空間を越えない移動表現は一般的に中間経路指向の下位分類である経過域指向の移動表現である。

境界を越えない移動を表す表現形式として、中国語では“在”や“順（着）”“沿（着）”“绕（着）”といった介詞構造が多用され、日本語ではヲ格やデ格が用いられる。一方、境界を越える移動を表す表現形式として、中国語では“从”や「動詞+名詞」形式（VL形式）が多用され、日本語では中間経路指向の表現だとヲ格のみを用いる。

中間経路指向とは対照に、起点指向の移動表現と着点指向の移動表現は必ず「起点/着点」と「起点/着点以外の場所」という複数の空間場所に関わるため、起点指向移動表現と着点指向移動表現は一般的に境界を越える移動表現である。

境界を越える移動であるため、起点指向の移動と着点指向の移動はそれぞれ「起点」から「起点以外の場所」へ、「着点以外の場所」から「着点」へ、というように明白な方向を示す。

本研究では、そういった移動における移動主や文脈などの要素に左右されず客観的に存在する方向のことを客観方向と呼ぶ。固有の方向関係を有する客観方向に対し、発話者の視点と関わる方向は主観方向と呼ぶ。

移動表現で用いられて移動行為が行われる場所を標示する場合、中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は形式の角度から見ると共通する部分がある。中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は共に境界を越える移動を表すことができない。また、両者とも主観方向を許容できない。しかし、中国語の“在”介詞構造は客観方向を許容できるのに対し、日本語のデ格構文は客観方向を許容できない。その他に、移動としても動作としても捉えられる一部の移動行為に関して、もしそれを移動だと捉えるとするならば、中国語ではそれが境界を越えない移動だと認識されているものの、日本語ではそれが境界を越える移動だと認識される傾向があると思われる。

一方、同じく形式的に対応しているとされる中国語のVL形式と日本語のヲ格構文の場合、VL形式はVがLを支配することにより、たとえVに様態移動動詞がくるとしても必ず結果を有するすなわち境界を越える移動を表す。それに対し、ヲ格構文はVに様態移動動詞がくる場合に境界を越えない移動を表すことができる。ここで注意すべきなのは、中国語における“跑操场（グラウンドを走る）”というようにVL形式は様態移動動詞を取りながらも境界を越えない移動を表すことができるが、それは恐らくVとLの組み合わせががイディオム化で意味が特定化しつまとまった行為として認識されるためだと考えられる。その証拠に、“跑（走る）”のかわりに“走（歩く）”を入れ替えると意味不明な表現になる。一方、日本語のヲ格構文は「グラウンドを走る」の他に、「グラウンドを歩く」「庭を飛びまわる」などといった表現ができるというように、VL形式より高い生産性を有する。

このように同じく他動性を表す表現形式でありながらも、VL形式とヲ格構文ではVがLを支配する際に注目が置かれる焦点が異なる。中国語はVL形式が移動事象を表すに際して他動性により移動における位置変化の範囲が空間場所を貫通しており、すなわち移動行為が空間領域を渡るような形を取るために、移動事象に完了性が求められる。それに対し境界を越えない移動を表す際には“在”や“从”介詞構造あるいは“绕（着）”のような具体的な移動経路を示す介詞構造を用いる。

それに対し、日本語のヲ格構文の場合、位置変化の範囲は移動動詞の性質により決まる。経路移動動詞がVにくると移動行為は注目される空間場所の境界を越えるが、様態移動動詞がVにくると移動は空間場所に沿って行われるか、境界

を越えない前提で空間場所全体を移動範囲として行われるかのように経路を取る。

また、様態移動動詞文は一見して無規則な経路を取るが、「グラウンドを走る」では「トラックに沿って走る」ことを、「公園を散歩する」では「公園の道に沿って歩く」ことを含意するように、実際のところ移動経路が暗示されることがある。このように経路移動動詞と様態移動動詞とそれぞれ共起するヲ格移動表現の相違及び様態移動動詞内部における相違からは、日本語のヲ格構文においてVがLを支配することにより移動経路が注目されていることが分かる。それに対し、中国語では“沿（着）” “順（着）” “绕（着）”などのような介詞を用いて具体的な移動経路あるいは軌跡を表すしかない。

以上のように、中国語と日本語は中間経路指向の移動を表す際、たとえ部分的に対応する形式であってもそれぞれ異なる着目点を有し、注目する移動の局面にも相違が見られる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名(高一波)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 副査 副査 副査 副査	准教授 教授 教授 教授 教授
		山川 太 今井 忍 三原 育子 古川 裕 岸田 泰浩

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語と中国語における移動表現、特に、種々の場面における「中間経路指向の移動表現」を中心に考察することで、両言語における移動表現の異同に対して明示的な説明を与えることを目指している。

第1章では、研究の背景が述べられると共に、本論文で扱われる「移動」の範囲設定がなされた。日本語と中国語は移動表現の形式において互いが対応していると思われる形式も、場合によっては同じ移動事象を表すことができない。そのことを傍証する事実として、中国語母語話者による以下のような日本語の誤用を挙げることができる。

*初めて新宿の街で（→を）歩いていた時、「へイ！！すごい人々ですね」と私はおばあさんに言った。

（寺村（1990:205））

*そして、山の小道で（→を）歩いて帰ると、樹齢が二千七百以上の神木を見えたり、春の時に桜の花を観賞したりして、こんな景色は人々に楽しませる。

（市川（2010:40））

このようなヲ格とデ格の混同による誤用に関して、張（2001）は中国語の母語干渉が原因であると述べている。中国語には「“在” + 場所名詞 + 動詞」という介詞構文があり、それが有する「原点」（「動作が最初から最後まで行われる場所（孟（1986:265））を表す働きは、ある程度日本語のデ格と共に通しているために、中国語母語話者はデ格を誤って用いてしまう」という。このように、場所を表すデ格形式と中国語の「“在” + 場所名詞 + 動詞」形式はある程度対応しているにも拘わらず、「在空中飞（空を飛ぶ）」は言えて、「*空で飛ぶ」が言えないことも含め、日中両語の移動表現の（非）対応関係に説明を与えることが本論文の目的である。考察対象となる「移動」の内訳は、①「主体移動と客体移動」②「客觀移動と主觀移動」③「境界を越える移動と境界を越えない移動」の3つのタイプとされる。

第2章では、③「境界を越える移動と境界を越えない移動」を中心に議論され、日本語と中国語における当該移動表現の形式について考察がなされた。本論文では、日本語の「渡る」「通る」や中国語の「过（渡る;通る;過ぎる;…）」「上（上がる;登る;…）」などのような「経路」が含意される移動動詞を経路移動動詞と呼び、日本語の「走る」「歩く」や中国語の「走（歩く）」「跑（走る）」などのような「様態/原因」が含意される移動動詞を様態移動動詞と呼ぶとしているが、これらの移動動詞は「境界越え」という点において異なった性質を見せることが様々な観点から論じられている。

第3章では移動表現における経路表現、具体的には客觀方向と主觀方向の区別を設定し、それらを中心に考察がなされた。方向を示す移動表現の多くは境界を越える移動を表すが、本論文では「起点」から「起点以外の場所」へ、「着点以外の場所」から「着点」へ、などといった、文脈などの要素に左右されずに客觀的に存在する方向関係を客觀方向と呼ぶ。たとえば、以下の中国語の例では、

“出”という方向補語により客観方向が示されている。その移動が「起点」とするのは「北京」という固有な空間場所であり、「起点以外の場所」とするのは「北京以外の場所」である。その表現で見られる移動の方向は「北京」から「北京以外の場所」へというような非常に明白なものであり、その意味で「客観方向」である。固有の方向関係を有する客観方向に対し、発話者の視点と関わる方向は主観方向と呼ばれる。

列车 从 北京 开 □ 了。

列車 “从” ペキン (交通機関が) 移動する 出る 完了
(列車は北京から出発した。)

第4章では、移動表現の“典型性”というものに焦点を当て、その典型性を可視化するための手段として「移動図表」による標示が提案された。典型性というものを取り出した理由は、移動表現と非移動表現の境界線がそれほど明確なものではなく、段階的(gradually)な変化が認められる類いのものであるからである。第2章および第3章で観察されたように、境界を越える移動表現というのは複数の空間場所に関わることで、境界を越えない移動表現よりも(移動に関して)典型性および具体性を有していると言える。このような移動としての典型性と具体性が高ければ高いほど、その移動表現は一般的な移動表現(換言すれば「移動表現らしい移動表現」)として捉えられる。逆に、このような典型性と具体性が低い場合には、非移動表現(多くの場合には、単なる動作表現)として認識される可能性が高くなる。

第5章では、第4章で提案された移動図表を用いて、日本語と中国語における移動表現が“在”・“顺(着)”・“沿(着)”・“绕(着)”・“从”・ヲ格構文・デ格構文というように形式ごとに考察された。デ格は中国語の“在”とはある程度対応しているが、“在”介詞構造では客観方向を許容できるのに対し、デ格構文では客観方向を許容することができない。“在”移動表現の移動図表での取得可能な数値範囲はデ格よりも広くなり、ゆえに、移動を表す際に、デ格文はほとんど“在”文に翻訳可能であるが、“在”文はデ格文に翻訳できるとは限らない、ということが導かれると主張される。このような「数値範囲の重なり」に着目すれば、日中両語の移動表現形式の(非)対応関係を効率的に整理することが可能となり、ひいては日本語教育への貢献も期待される点は、本論文の美点であると考えられる。

本論文の斬新さとしては、従来、数値化されてこなかった移動の“典型性”というものを「移動図表」なる手段によって明確に可視化したことが、まず挙げられる。もちろん、そもそもこのような手段が普遍的で原理的なものであり得るのかといったことは今後、別の言語現象や他言語への応用や改変などを経て慎重に議論されなければならないものの、今までなされなかつた説明方法を志向した点は挑戦的なものとして評価されるべきものである。一方で、分析や論述に粗さが見られること、例文として挙げているデータがやや古い時代のものが混在していることなど、いくつかの不備が指摘されるものの、それによって上述の価値が無くなるということはない。

以上の審査結果を踏まえて、本論文が博士(日本語・日本文化)の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、審査委員会全員の一致により合格という結論に至った。